まえばし教育の日文化事業

130th Anniversary 前橋市市制施行 130周年 1892-2022

新出土文化財展2022

－令和３年度発掘調査の成果－

まえばし教育の日

元総社蒼海遺跡群(146)（礎石建物跡）

蛇穴山古墳（東側トレンチ）

上細井中西部遺跡群 №4（１号墳）

元総社蒼海遺跡群(143)（白磁）

横沢柴崎遺跡（柄鏡形敷石住居跡）

上野国府等範囲内容確認調査（遺物集中）

元総社蒼海遺跡群(143)（蒼海城堀跡）

西部第一落合遺跡群(4)（丸鞆・巡方）

令和３年度も市内各所で、公共事業、民間開発事業などに伴い、発掘調査を実施しました。縄文時代から中世に至る様々な時代の遺構や遺物が新たに発見されました。

これらの貴重な発掘調査成果を広く市民の皆様にご覧いただくため、「新出土文化財展２０２２」を開催いたします。初冬のひと時、古(いにしえ）に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

令和４年 11月 18日(金)
～ 11月 27日(日)

会場　臨江閣別館 １階 西洋間
前橋市大手町三丁目15番

時間　９：００ ～ １７：００（入館は16：30まで）
月曜休館

主催　前橋市教育委員会事務局文化財保護課　　前橋市総社町三丁目11番地4　電話 027-280-6511

元総社蒼海遺跡群

●多数の高級陶磁器を発見

元総社蒼海遺跡群からは、国府のマチならではの特殊な遺物が数多く発見されています。その中でも、舶載品の白磁・青磁をはじめ高級食器の緑釉陶器・灰釉陶器の出土量の多さは、上野国（群馬県）における他の一般集落と比べて圧倒的な差があります。

出土した陶磁器の一部

●完形の白磁埦を発見

平安時代の土壙墓から北に頭を向けた人骨一体と枕元の位置から副葬品と考えられる完形品の白磁埦が出土しました。白磁埦は10世紀後半の優品で、中国の定・邢窯系の舶載品と考えられます。また、底部外面には「梅」の墨書があり、中国の商人によって記されたサインと考えられております。同様の例は中国との貿易玄関である博多や平安京で確認されておりますが、完形品として東日本で出土することはきわめてまれです。

底部に「梅」の墨書

●国府に関連する可能性のある礎石建物跡を発見

宮鍋神社の南150mほどの地点で、礎石建物跡を発見しました。今回発見した礎石建物跡では、礎石や根石を確認することができませんでしたが、掘込地業の部分を確認することができました。

掘込地業は、建物の柱列の下を溝状に掘り下げて地盤を固める「布地業」という工法で行われており、その規模は東西が13mほど、南北5.4m以上であることが確認できました。

宮鍋神社の南側ではこれまでに10棟の礎石建物跡、6棟の掘立柱建物跡のほか、これらの建物跡が構成する施設の区画溝などの官衙に関連する遺構が発見されています。こうした建物群は、その規模や配置から、倉庫として使用されていたものと考えられます。元総社町には、現代でいう県庁にあたる上野国府が設置されていたと推定されており、国府に関連する倉庫である可能性も考えられます。

礎石建物跡（白線で囲われた部分が布地業）

推定上野国府跡

古代の井戸跡と礎石

●井戸に落とし込まれた礎石？

平安時代の井戸跡から長さ約1mの大きな石が落とし込まれたような状態で出土しました。その大きさや平坦面をもつ（平坦な面を上に据えて柱を立てる）ことから、礎石建物の礎石であった可能性があります。礎石建物跡の基礎に残されていた礎石が不用となり、井戸を埋める際に同時に埋められたものと考えられます。

ワンポイント解説

古代の役所などを作る際、建物が重みで沈まないよう「掘込地業」と呼ばれる地盤改良工事を行うことがあります。掘込地業は、地面を掘ったあと、その中に少しずつ土を入れて、棒などでつき固める「版築」という工法で行われます。こうしてできあがった固い基礎の上に礎石を据え、その上に柱を立てて建物を建てます。また、礎石下には、礎石を固定するため、「根石」と呼ばれる小さな石をたくさん敷くことがあります。

掘込地業と柱の建て方（模式図）

推定上野国府跡

●平安時代後期の土器集中

東西約4m、南北約3.5mの浅い半円形の窪みに多量の土器(遺物収納箱15箱)が捨てられたような状態で出土しました。出土した土器は素焼きの土師質土器で、直径約10cmの皿状の土器が多数を占めますが、直径約15cmの坏状の土器も出土しています。その他に高級食器である白磁の破片も少量ですが出土しています。土器の多くは破片の状態で出土しており完形品はあまり多くありませんでした。時期は周辺の礎石建物が廃絶した後の11世紀頃と思われ、宴席で使用した食器を廃棄したものと考えられます。

土器集中

西部第一落合遺跡群

●礫槨木棺墓?を発見

落合(4)調査区南隅で長方形状に石が組まれた遺構を検出しました。この石組遺構からは、木質を含んだ鉄釘が出土し、遺構内の北側で10世紀前半頃の灰釉陶器の埦などが出土していることから礫槨木棺墓(石組をした穴の中に木製の棺を納めた墓)の可能性が考えられます。

官人的な副葬品は見られませんが近接する7号竪穴建物跡(9世紀後半)からは役人が使用した帯飾りである銅製の巡方と石製の丸鞆が出土していることから、この墓の被葬者は下級役人などの富裕階層の人だったのかもしれません。

礫槨木棺墓

総社古墳群

●史跡宝塔山古墳

古墳北側の周堀を調査し、周堀北辺の立ち上がりを2か所確認できました。これにより東と北の二辺の周堀の範囲をおおむね確定させることができました。また、墳丘の北西コーナーが見つかりました。墳丘の裾が確認できたのは初めてで、古墳の大きさを知る上で重要な手掛かりが得られました。

墳丘北西コーナー(白の破線)

南西コーナーの2段の葺石

●史跡蛇穴山古墳

古墳周辺の3か所で調査を行ったところ、各調査区で墳丘裾の葺石を確認することができました。特に南西コーナーでは1段目および2段目の葺石が良好な状態で残っていました。

また、今回初めて上段墳丘の調査を行ったところ、想定以上に残りが良く、丹念に葺かれた葺石が見つかりました。墳丘上部では盛土を押さえる葺石の外側に、装飾のための葺石を施していることが分かりました。このような葺石の構築方法は前々代の愛宕山古墳と共通し、代々特殊な構築技法により古墳づくりを行っていたと考えられます。

上細井中西部遺跡群

石室

●円墳の発見

古墳時代後期の円墳を確認しました。古墳は上毛古墳総覧に載っている南橋村45号墳と推定されますが、後世の耕作などで削られてしまったため、横穴式石室の一部が残されているだけでした。石室内からは遺物はほとんど発見されませんでしたが、周堀から大刀や鍔が出土しました。発見された鍔には銀象嵌という装飾が施されていたことが明らかになっています。大刀や鍔は発見された状況から、石室内に副葬品として埋葬された後に早い段階で周堀へ投げ込まれたと考えられます。

●石組カマドを検出

焚口から煙道部にいたるまで石材によって組まれたカマドをもつ奈良時代の竪穴建物を2軒検出しました。本遺跡群の多くの竪穴建物のカマドは、集落内で地山(関東ローム層)を採掘して得られた黄褐色の粘土を用いて作られたものが大部分を占めていますが、石組みのカマドに使われている石材は加工されていない河原石であり、わざわざ集落の外に出て河川から石を運び込むという手間をかけています。また石材は隙間のない整った状態で組まれており、カマドに対する強いこだわりが感じられます。

石組のカマド

横沢柴崎遺跡

●柄鏡形敷石住居跡の発見

住居の床面に石を敷き、平面形状が柄鏡に似ていることから柄鏡形敷石住居と呼ばれ、縄文時代中期後半から後期初頭に関東甲信越地域に広く分布する住居形態の一つです。本遺跡で発見された柄鏡形敷石住居は、六角形状の本体部分に幅70cm、長さ2.2mの張出しが連結され、本体中央部やや南寄りに石囲炉、張出連結部分のやや内側と張出先端部に土器が埋められていました。本住居跡のように床全面に石を敷いているものは珍しく、貴重な発見となりました。

埋設土器

西善福禄遺跡

●浅間山の火山灰で埋まった水田跡の発見

平安時代末期、本遺跡のある前橋南部地域一帯では、約109m四方の正方形を基本単位とする条里地割に基づき、大規模な水田経営が行われていました。しかし、これらの水田は、天仁元(1108)年の浅間山の大噴火により火山灰で厚く覆われてしまいました。本遺跡においてもその被害は甚大で、噴火後しばらくの間水田は放棄され、復旧作業は行われなかったことが土の堆積状況から確認できました。

平安時代の水田跡
(白線は水田のアゼ)

こちらのQRコードから西善福禄遺跡の紹介動画(約3分)がご覧いただけます。Wi-Fi環境等がある場所でお楽しみください。